



曲の盆踊(巖原町)



三根上里の盆踊(峰町)



吉田の盆踊(峰町)



阿連の盆踊(巖原町)



対馬の宝が世界の宝に

「対馬の盆踊」ユネスコ無形文化遺産登録

このほど、ユネスコの無形文化遺産に、日本の41か所で踊られる「ふりゅうおどり風流踊」が登録されました。その一つには「対馬の盆踊」が含まれています。対馬の人たちが守ってきた島の宝のこれまでと、これからについてご紹介します。

「風流踊」のユネスコ無形文化遺産登録決定を受けて

対馬市長 比田勝 尚喜

このたび、ユネスコの第17回政府間委員会において「風流踊」がユネスコ無形文化遺産に登録されることが決定しました。

「風流踊」は祭礼や年中行事などで地域の人々が参加し、様々な時代背景の中で生活や風土と関わり、人々の情熱によって生み出されてきたものです。今日まで伝承されてきた貴重な文化財であり、地域の活力の源としても大きな役割を果たしてきました。

対馬においても各地域で古くから踊られてきましたが、近年の担い手の減少や高齢化、新型コロナウイルス感染症の影響によって保存継承が難しくなり、現在はわずかな地域で伝承しているだけになっています。

今回のユネスコ無形文化遺産登録を励みとして、対馬での盆踊の復活や保存継承に向けた課題の改善、未来を担う子どもたちへの普及啓発など、更なる取り組みの推進に努めてまいります。

世界の垣根を越えて文化を守る

ユネスコ（UNESCO）は、1946年に国連の中に作られた、文化・教育・科学技術などを担当する機関で、日本を含む195加盟国で構成されています。ユネスコでは、国際化や社会の変化によって、これまで世界の人たちが各地で行ってきた芸能や儀式、伝統工芸技術などが消えることを防ぎ保護していく必要があると、2004年に「無形文化遺産の保護に関する条約」を締結して、国際的に保護する取り組みを行っています。現在「人類の無形文化遺産の代表的な一覧」に530件が記載されており、日本では、能や歌舞伎といった芸能から和食や手漉き和紙の技術まで、23件が記載されています。

地域の歴史や風土を反映して発達した風流踊ふりゅうおどり

今回、新たに登録された風流踊の「風流」とは、もともと、都で流行し、洗練された美しさを指す言葉で「みやび」と呼ばれていました。平安時代ごろには、人目を驚かすための派手な衣装を着たり、道具を持ったりすることを風流と呼ぶようになり、読み方も「ふりゅう」となりました。風流踊は、鮮やかな衣装や道具を身に着け、独自の文化を形成して今に伝わっています。

神奈川県三浦市で晴れ着姿の少女が小正月に踊る「チャッキラコ」など、全国41か所の踊りが登録され、長崎県内からは対馬のほか、雨ごいや五穀豊穡を祈願する平戸市の「平戸のジャンガラ」、戦国時代に始まったとされ、祝いの芸能として伝わった大村市の「大村の沖田踊・黒丸踊」の3件が名を連ねています。



チャッキラコ（神奈川県三浦市）



沖田踊（大村市）



黒丸踊（大村市）



ジャンガラ（平戸市）

騒いで祟りを追い出す!?

風流踊が踊られるようになった理由は様々ですが、その中に、人々に降りかかる災いを追い出すという理由があります。

医学が発達していなかったころ、人が死んでしまうような病気が流行すると、その原因は恨みを持ったまま亡くなった人の霊や災いをもたらす神様などのせいだと考えられていました。人々は、鐘や太鼓を鳴らし、道具や衣装に工夫をこらしながら地域を練り歩き踊ることで、災いを鎮め、遠くへ追い出そうと考えました。博多祇園山笠や京都の祇園祭にその形が見られ、対馬では、盆踊の中で「エツリ」と呼ばれる竹に飾りをつけたものを持って地区を練り歩き、最後に解体したり海に流したりするを通して、先祖の霊に捧げたり、祟りを追い払ったりするという意味があるとされています。



エツリを持って地域を練り歩く



万松院の本堂にかかる行列を描いた額。大正時代に当時を懐かしんで描かれ奉納されたとも考えられている

対馬の盆踊とは

その起源は15世紀までさかのぼるとされますが、対馬を治めていた宗家の先祖を供養する目的で、家臣たちが「御卵塔風流」（御卵塔とは墓や墓石の意味がある）を、宗家から特別な許可をもらい貿易などの商売を行っていた「六十人」と呼ばれる商人団の子どもらが「六十人踊（町踊・万松院踊とも）」を踊り始めたのが源流といわれ、そのあと島の各地に広がっていったと考えられています。宗家の先祖のためだけに踊られていた御卵塔風流は、明治時代には維持することが厳しくなり、規模が縮小しそのうち途絶えることとなります。

地域ごとに進化を遂げた盆踊とその後の衰退

城下町で行われていた2つの踊りは、対馬各地で踊られることとなり、約300年前の記録に地域ごとの盆踊のことが書かれています。基本的には、その地域の本家の長男が踊りに参加し、年齢や地位などの厳しいきまりを守りながらも、独自の進化を加えながら続けられてきました。

明治時代には、島内各地80か所あまりの地域で踊られていた盆踊ですが、時代の変化によって徐々に減っていき、戦後昭和30年代以降は生活環境の変化や、これまでのきまりが時代にそぐわないなどの理由によりほとんどの地域で盆踊が踊られることはなくなりました。

今から40年ほど前には、地域おこしのため、途絶えた盆踊を復活させようと地域の青年団などが復活に取り組みましたが、それらも徐々に減り、現在も地域で踊られている盆踊は5か所のみとなり、うち4か所がユネスコ無形文化遺産として登録されました。



一時復活した盆踊（青海地区）



橋の欄干に描かれたレリーフ（雞知地区）

対馬の盆踊を長年研究され、対馬の盆踊保存調査の委員長を務められた、早稲田大学の和田修准教授にお話を伺いました

国内に残る風流踊の多くは、その地域に一つの形式しか行われていないのですが、対馬は、各地域ごとに違う形式で踊られていて、そこだけで見ても他地域のものとは大きく違うところがあります。これは、御卵塔風流や六十人踊が源流とはなったものの、島内外で流行した踊りやお芝居などのテイストを融合させて独自の発展を見せているためで、地域の青年教育としての面と、数少ない地域の娯楽としての面が作用しています。流行の発信となった地域ではすでに途絶えてしまっているものもあり、日本の民俗芸能を知るうえでもとても貴重な存在です。また、宗家文書の毎日記をはじめ、日常の一行事に過ぎなかった盆踊を細かく記録している資料が数多く残されていることも大変貴重なことです。多くの盆踊が途絶えてしまったことは大変残念ですが、この無形文化遺産登録をきっかけに、対馬のみなさんには盆踊にさらに関心を持っていただければと思います。



盆踊の関係者に聞き取りをする和田准教授（右側奥）

対馬の伝統を後世に伝える

市内では、地域で伝統を継承するだけでなく、子どもたちなどが取り組みその姿を残していこうという取り組みも行われています。

仁田中学校では、平成20年から中学校で瀬田地区の盆踊のうち、綾きりを学校の文化祭や、地域の祭りなどで披露してきました。今年も、1年生の生徒が11月から練習をスタートさせ、文化祭などで披露しました。

綾きりは、舟の櫓を合わせるために漕ぎ手のリズムを取る役で、歌に合わせてながら、白い采を振ります。指導役の地域の人動きをみながら、3分ほどの踊りを踊ります。



気持ちよく綾をきることができたり、みんなが揃う瞬間が楽しいところです。普段することがない動きなので、なかなか慣れないところが大変ですが、一生懸命伝統をつなげていきたいと思えます。

仁田中1年 中村 雅斗^{まさと}さん



子どもの頃、唄い手として参加していましたが、途中で行事がなくなり、一度は青年団でやったものの続かず、現在中学生に踊ってもらっています。昔の文化を、学校がつかないでくれて、中学生が継承してくれることは、本当にありがたいことです。綾きりの迫力や力強さを、踊る中学生や観てくれる人たちに感じてほしい、より多くの人たちに知ってもらいたいと活動を続けています。

瀬田地区郷土芸能保存会 惣島 由一^{よしかず}さん

対馬の盆踊を世界に誇る文化に

対馬の盆踊は、海や山といった自然の恵みに感謝しながら暮らしてきた対馬の人たちが生んだ宝物だと思います。生活環境や時代の変化によって多くの盆踊が対馬から消え、現在も厳しい状況にあることは確かですが、対馬の人たちが育んできたものが、世界の人たちに認められたことをきっかけに、悩みや問題点を共有し、一緒に解決できる道を考えていければと考えています。



対馬盆踊保存連合会
永留 安生^{やすひさ}会長

世界の宝物となった対馬の盆踊。記憶の継承や担い手不足など、取り巻く環境は厳しいものがあります。この宝物を、次の世代に渡すために、私たちがまずできることは、対馬の文化に興味を持つことではないでしょうか。